

浜通いの高校生・教員で 車座意見交換会を開催しました

- ・ 目的：東日本大震災から 15 年目という節目を迎えるにあたり、震災の記憶を持たない世代である高校生が、東日本大震災や東京電力福島第一原子力発電所の事故についての事実を改めて学び、自分事として捉える。
- ・ 開催日時：令和 8 年 3 月 7 日（土）8:15～18:00
- ・ 開催場所及び講師：震災遺構浪江町立請戸小学校、浪江町立大平山霊園、道の駅なみえ、中間貯蔵施設、link する大熊〔講師：開沼博（東京大学大学院）、情報提供者：佐藤由弘（大熊町教育委員会教育長）〕
- ・ 参加者：浜通りの進学校の生徒及び教員 19 名
- ・ 内容：－震災遺構浪江町立請戸小学校、浪江町立大平山霊園見学
－講話「東日本大震災後の福島の復興について」
－中間貯蔵施設見学
－情報提供
－グループワーク、質疑応答
- ・ 概要：震災遺構浪江町立請戸小学校にて津波による建物の被害状況や展示資料等を見学し、浪江町立大平山霊園では、開沼講師から震災の様子や浪江町の復興について説明を受けた。講話では、震災前後の双葉郡の姿から復興について理解を深めた。その後中間貯蔵施設では、除去土壌や除染廃棄物等が最終処分するまでの間、安全に管理・保管されていることについて学び、最後に link する大熊にて震災後の大熊町の教育や学び舎ゆめの森の開校について、情報提供があった。最後に、学んだことの振り返りとして、福島県の復興についての意見交換を行った。生徒からは「初めて意見交換に参加してみたが、これまで知ることができなかった知識や自分の考えを知ることができて良かった。この経験をこれからの進路や人生に生かしていきたい。」、教員からは、「高校生たちにとって、まだ復興途上の浪江、特に大熊町を見られたことは非常に重要な出来事であったと思う。今後も是非、このような機会があれば利用したい。」等の意見があった。

【主な意見交換等】

- ・ 町が復興していくことと、住民の思いのどちらが大切なのかについて考える会となった。そもそも復興に終わりはあるのか、東日本大震災の痕跡が残る建物をいつまで残すべきなのか等、福島の復興には課題がある。
- ・ 今後自分たち若い世代にできることは、この問題を自分ごととして捉えることだと思う。今日経験したような会に少しでも多くの高校生が参加し、一人でも多くの人に目を見たことや経験したことを伝えていくことが、とても大切だと感じた。
- ・ 教育長の情報提供から、学校教育のあり方や、私たちのように震災を経験していない若い世代に対する学校教育のあり方について、考える必要があると思った。



講話の様子



グループワークの様子